

# 特別支援教育における家庭・学校間の連携システムの構築

—特別支援学校における「デジタル連絡帳」活用実践の効果—

中川 宣子 高岸 正司

(京都教育大学附属特別支援学校)

Construction of the cooperation system for special needs education between home and schools.—  
Effect of “Digital Cooperation Notebook ”

Noriko NAKAGAWA Masashi TAKAGISHI

2015年11月30日受理

**抄録**:本研究は、京都教育大学附属特別支援学校において「デジタル連絡帳」の活用と連携システムを構築、運用し、その実践結果から、家庭と学校における「連携」についての効果について検証した。活用実践から9つの事例を抽出し、①家庭と学校間の連携、②子ども同士の連携、③家族の連携、④家庭・学校間の連携による教育共生と4つの観点で考察した。これにより「デジタル連絡帳」の活用と連携システムによって、家庭と学校における日々の子どもの情報は、よりリアルに共有できるようになり、子ども情報の可視化、情報共有は、家族間のつながり、家庭と学校とのつながりを太く深くしていることが示された。特別支援教育における子どもの成長・発達をよりよく支援するための具体的な連携システムのツールとして、今後も「デジタル連絡帳」の活用実践の継続、普及が期待される。

**キーワード**:「デジタル連絡帳」の活用と連携システム、「連携」、教育支援活動

## I. はじめに

特別支援教育において子どもの教育・支援活動における保護者・教師・学校間の連携、協力は不可欠である。そのためには保護者・教師・学校が、子どもの情報を互いに伝達し合い、正確に理解し、情報を共有化し、教育支援活動の連携を図ることが重要となる。

保護者・教師・学校間の教育支援の連携の現状はというと、懇談会や学校・学級通信、電話、通知表、個別の指導計画といった様々な方法で実践がなされている。ここからわかるように、保護者・教師・学校はそれぞれに、子どもに関する多様な情報を発信している。ところが、それぞれから発信される情報は、継続的というより、断続的であり、また情報が一方通行であることも多い。そのため、互いの共通理解の不足による誤解が生じたり、子どもの捉え方にずれが生じたり、コミュニケーション不足のため対応が後手に回ったりといった問題が起こっていることが少なくない。これは家庭・学校間の信頼感不足や関係の悪化を生み、やがては学校への不信・不安を生ずることすらある。子どもに関する日々の情報が、バラバラであり共有化できていないがために、本来の目的とする支援連携が効果的に行われていない現状である。

そこでこれまで、これらの問題を解決するために、保護者・教師・学校間の情報をリアルタイムに共有化し、子ども情報を蓄積、データ化し、データ化した情報を活用するための連携システムを構築、運用し、保護者・教師・学校の三位一体の教育支援連携活動のより強化を図ることによって、子どもの成長・発達に貢献することを目的として研究を進めてきた。

特別支援学校では従来より「連絡帳(手書き)」というものがあり、保護者と教師が、日々の子どもの様子を記録、伝達し合うツールとして、多くの学校で現在も活用されている。そこには子どもに関する毎日の生活・学習実態が記録されている。しかし「連絡帳」で集約した情報は、子どもに関する貴重な情報にもかかわらず、紙ベースだということもあって、十分に活用できていない現状がある。そこで、アナログな「連絡帳」をアプ

リケーション化した「デジタル連絡帳」を使って、日々の子どもの情報を家庭と学校間で共有し、蓄積した情報を活用した実践を行えば、保護者・教師・学校の三位一体の教育支援連携活動のより強化を図り、子どもの成長・発達に貢献できると考えた。この「デジタル連絡帳」は、毎日の健康状態、就寝・起床時刻、排便、食事といった基礎的な情報から、登下校の様子、家庭での様子、学校における学習の様子といった内容を、文字、写真、動画、音声、表情イラストを使って、入力できる機能をもち、そして入力された情報は、サーバーに蓄積し、データ化して、保護者・教師・学校が、いつでも情報を閲覧できるようになっている。しかしまだ、教育現場において、「デジタル連絡帳」の性能評価やユーザー評価によりその有効性や、保護者・教師・学校が連携して、子どもの成長・発達を支援強化する連携システムの事例についての検証ができていない。

そこで本研究では、「デジタル連絡帳」を京都教育大学附属特別支援学校で活用実践し、家庭・学校間の連携システムを構築し運用した結果から、その効果について検証する。

## II. 方法

### 1. 「デジタル連絡帳」の活用と連携システム実践の概要

これまで「デジタル連絡帳」は、京都教育大学附属特別支援学校小学部において、2015年1月～3月に既に活用実践を行っているが、さらに本研究では実践対象者を新規に設定し、以下のような手続きを得て活用実践を行った。

- (1) 京都教育大学附属特別支援学校小学部教員を対象に「デジタル連絡帳」の活用と連携システムについての説明会を実施
- (2) 京都教育大学附属特別支援学校小学部低学年保護者（6名）を対象に「デジタル連絡帳」の活用と連携システムについての説明会を実施
- (3) 機器、Wi-Fi環境等の整備
- (4) 6家庭を対象に「デジタル連絡帳」の活用と連携システムの運用方法の説明会を実施
- (5) 家庭・学校間で「デジタル連絡帳」の活用と連携システムの実践開始
- (6) 小学部低学年の授業「朝の会」で「デジタル連絡帳」の活用した指導実践開始

### 2. 対象

京都教育大学附属特別支援学校小学部低学年児童6名(A, B, C, D, E, F)の家庭と、京都教育大学附属特別支援学校

### 3. 期間

2015年9月～2015年12月

### 4. 活用実践場面

#### (1) 家庭と学校間の「デジタル連絡帳」の活用と連携システム

「デジタル連絡帳」と連携システムは、家庭ではタブレットPCを、学校ではPCを使い、Wi-fiを経由して、毎日の子ども情報を家庭と学校間で送受信し合い、家庭と学校を繋ぎ、子ども情報を共有、活用する支援システムである。具体的には各家庭では、「デジタル連絡帳」家庭通信欄に必要事項を記入し、送信する。記入には写真、動画、イラスト、文字を使用する。また「デジタル連絡帳」学校通信欄を受信し、コメントを記入し、送信する。記入には、文字とイラストを使用する。

学校では、「デジタル連絡帳」学校通信欄に必要事項を記入し、送信する。記入には写真、動画、イラスト、文字を使用する。また「デジタル連絡帳」家庭通信欄を受信し、コメントを記入し、送信する。

これにより、日々の学校での学習状況や家庭生活の様子をリアルに把握し、共有活用することができる。

## (2)授業「朝の会」での「デジタル連絡帳」の活用

京都教育大学附属特別支援学校小学部では登校後、ほぼ毎日1時間目に「朝の会」という授業時間を設定している。この「朝の会」は、①挨拶、②子どもが自分の名前を発表する、③子ども達同士でその日の学習予定を確認する、④チームティーチングをしている教師間で子どもの家庭での様子や健康状態を確認する、といった授業である。この中で、④チームティーチングをしている教師間で子どもの家庭での様子や健康状態を確認する場面で、これまで「紙の連絡帳」に書かれた内容を読み伝えていたところを、本研究では「デジタル連絡帳」を活用することにした。

## Ⅲ. 結果（対象事例の抽出）

以下、1. 家庭と学校間の「デジタル連絡帳」の活用と連携システム4事例と、2. 授業「朝の会」での「デジタル連絡帳」活用5事例について抽出し、考察を試みた。

### 1. 家庭と学校間の「デジタル連絡帳」の活用と連携システム事例

#### (1)「体育」サッカー：11月某日：Aさん（写真1, 2）

学校にて「体育」サッカーの授業を実施する。その学習のAさんの様子を写真に撮り、「デジタル連絡帳」の学校通信欄から送信する（写真1）。Aさんの家庭で学校通信欄を閲覧する。「今日、学校でサッカーしたんか？」と家族で話題になる。一緒に写真を見ていたAさんが、サッカーボールを蹴るまねをして、家族に見せる。その蹴るまねの様子を母親が動画で撮影する（写真2）。「デジタル連絡帳」家庭通信欄で、サッカーボールを蹴るまねをする動画を学校に送信する。翌日学級の「朝の会」の時間に、「デジタル連絡帳」家庭通信欄を視聴する。家庭でサッカーボールを蹴るまねの動画を、クラス全員で視聴する。視聴しながら「昨日サッカーしたなあ。」「上手にお家でお話したね。」と教師が言葉かけをする。子ども達からも「Aちゃん、サッカーしたな。」という声上がる。当事者であるAさんは、席を立ち上がってTVモニターの前へ行き画面を指さして、「うん！」と大きくうなずき微笑む。



写真1：学級通信 Aさん



写真2：家庭通信 Aさん

#### (2)スケート教室：11月某日；Aさん、Bさん（写真3, 4, 5, 6）

小学部の年間行事の一つとして「スケート教室」が例年設定されている。年に一度の例年行事であり、対象となる子どもの2年生は昨年度に経験をしているが、1年生3名にとっては、家庭や保育所等でもこれまでにスケートの経験がないことが事前調査でわかる。そのためどの家庭も、初めての体験学習であるということから、個人差はあるものの不安を抱えていた。そこで学校では、この不安を軽減し、さらに意欲を高めてほしいと願い、「スケート教室」前日、事前学習「スケート教室に向けて」の授業を行った。授業内容は、フィギュアスケートの浅田真央さんの演技をテレビで見たり、昨年度の学校のスケート教室の写真を見たりした（写真3）。すると、1年生3人ともテレビ画面の映像や写真を食い入るように視聴し、中でも1年生の2人は、その場で席を立って、フィギュアスケート演技の回転の模倣をして、クルクル回りだす姿を見せた。

この事前学習の様子を写真で撮影し、この日の「デジタル連絡帳」の学校通信欄で、学習内容文字で記入し写真と共に家庭に送信した。するとこの日の1年生2件の家庭通信欄には、スケート教室で着用する服、ヘルメットを身に付けた子どもの写真が添付され、学校に送信されてきた（写真4, 5）。『家庭の様子欄（自由記述欄）』には「スケート当日の格好でハイポーズ。初めてのスケートどうなることやら（Aさん）」「スキ

ウェアにヘルメットで、頑張ります！！よろしくお願いします。(Bさん)」と記入されていた。「スケート教室」当日、子ども達はスケート用の服を身にまとい、元気に登校し、スケート教室を楽しんだ(写真6)。



写真3：授業「スケート教室に向けて」 写真4：家庭通信Aさん 写真5：家庭通信Bさん 写真6：スケート教室

### (3) 家族との写真・動画：9月～12月：6名(写真7, 8, 9)

家庭からの「家庭通信欄」に添付され送信されてくる写真や動画は多数であり、子ども達の日々の家庭での様子が、リアルタイムに具体的な情報として伝達される。その内容には、兄弟姉妹や父親といった子ども本人と家族との写真や動画も多い。例えば、兄弟姉妹で遊んでいる場面(写真7)、並んでポーズをとっている場面、家族と食事や遊んでいる場面(写真8, 9)、家族のそばについて回る場面・・・といったような写真や動画であった。



写真7：家庭通信Cさんとお姉さん 写真8：家庭通信Dさんと弟さんとお父さん 写真9：家庭通信Eさんとお父さん

### (4) 子どもの好きなこと・得意なこと、子どもが頑張っていること的话题：9月～12月：6名(写真13, 14)

家庭からの「家庭通信欄」で送信されてくる写真や動画を含めた話題の中で、一番頻度の多い内容は、子どもの好きなこと、得意なこと、がんばっていることであった。例えば、送信される写真や動画で言えば、本、DVD、ゲーム、乗り物鑑賞、工作、描画、書字といった好きなこと・得意なことをしている場面であり、また料理、鍵閉め、洗濯たたみといったお手伝いを頑張っている場面の写真や動画が、頻度の高い結果となった。

## 2. 授業「朝の会」での「デジタル連絡帳」活用事例

### (1) 「お家見よう！」の合図(写真10)

特別支援学校小学部で毎日1時間目の授業「朝の会」にて、「デジタル連絡帳」家庭通信欄、学校通信欄を子ども達、教師全員で視聴する。

活用実施当初は教師が「デジタル連絡帳を見ましょう」の言葉を合図に視聴が始まっていたが、活用実施早々から、子ども達から「お家見よう！」という発言が出るようになった。子どもがこの「お家見よう！」と言うと「よし、お家見ようか！」と教師が答えることを合図に、子ども達は座っていた椅子を持って、TVモニターの前に集合するようになった。



写真10：授業「朝の会」

### (2) 写真や動画のリクエスト

視聴する順番を決定するのに「Aちゃんから」と教師が選択していたが、その後子ども達から「Aちゃんから見る」「Bちゃんのお家見る」と選択し、リクエストするようになった。同じ動画を「もう一回」と言っ

**(3) 自分の写真や動画を視聴した時の反応 (写真 11)**

教師は書かれている文章を読み上げながら、添付されている写真や動画を提示する。すると、自分の写真や動画を見ながら、内容を紹介されたDさんは画面に視線を向けた。Bさん、Eさんは得意げに微笑んだ。Aさんは席を立ちあがり画面を指さし「見てみて!」と言い説明し始めた(写真 11)。Fさんは「これ〇〇してるねん。」と話だした。



写真 11: 授業「朝の会」

**(4) 友だちの写真や動画を視聴した時の反応 (写真 12)**

友だちの写真や動画を視聴した子どもからは、「Aさん、すごい!」という称賛の声があがり、「Bさん、〇〇好きなん?」「これ、好きやってん。」「そうなん。」といった会話が始まった(写真 12)。



写真 12: 授業「朝の会」

**(5) 自分と友だちの家庭での同じ場面 (写真 13, 14)**

一人の子どもの家庭通信欄と共通の内容の写真や動画が、他の子どもも家庭通信欄から送信されてくることがあった。写真 13 は鍵の開け閉めが共通しており、写真 14 はハンバーグづくりのお手伝いが共通した内容であった。



写真 13: 家庭通信 F さん、A さんの鍵の開け閉め



写真 14: 家庭通信 F さん、B さんのハンバーグ作り

**IV 考察**

家庭と学校間の「デジタル連絡帳」活用と連携システム4事例と、授業「朝の会」での「デジタル連絡帳」活用5事例を、「連携」という観点で分析し、「デジタル連絡帳」活用した実践の効果について考察を行う。

ここでいう「連携」とは、「連絡を密に取り合っ、一つの目的のために一緒に物事すること(『大辞林三版』)」つまり、互いに情報を共有し合っ、一つの目的のために一緒に物事することとする。

以下4つの「連携」、①家庭と学校間の連携、②子ども同士の連携、③家族の連携、④家庭・学校間の連携による「教育共生」の観点から考察を行う。

**1. 家庭と学校間の連携**

結果1(1)「体育」サッカーの事例にみられるのは、「デジタル連絡帳」学校通信から、その日のサッカーの学習内容を家庭で受信することにより、サッカーのことが話題になったことから、Aさんがサッカーボールを蹴って見せる姿に結びついている。Aさんから見れば、今日学習した内容を、「デジタル連絡帳」の画像を手がかりに、また家族が画像を見て話題にしたことを手がかりに、今日の学習内容を振り返る、復習することができている。この復習の様子は、家族から「サッカー、がんばったんやね。」「そんな風に蹴ったんやね」と家庭の中で認められる機会となっている。さらにこの一連の家庭での様子が、「デジタル連絡帳」の家庭通信によって、翌日学校で受信され、「朝の会」で紹介されると、Aさんは得意げに説明を始める。友だちからも先生からも、「すごいね!」「お話ししたんやね。」と認められる。サッカーという一つの学習について、視覚的に、家庭

と学校とが情報を共有することによって、子どもは家庭と学校とで認められる機会を得る。この認められる経験の積み重ねは、子どもの自信となり、次の活動への意欲・積極性へと繋がっていく。まさに「デジタル連絡帳」の活用によって、Aさんを支援する言葉かけが生まれ、Aさんの学習を認め、学習意欲の向上を生み出すことができた事例といえる。

また1(2)のスケート教室の事例では、学校行事に向けた事前学習をして意欲を高めている。その様子が家庭に伝えられることによって、家庭でもその意欲を持続したまま、準備した服装を着せるという行動に繋がっている。家庭でのこの行動は、翌日のスケート教室へと繋がる。つまり「デジタル連絡帳」の活用によって、学習への意欲を持続して高めることができた事例である。

このように「デジタル連絡帳」を活用することにより、家庭と学校がその日その時々、まさにリアルタイムな情報の可視化により簡単に情報共有が実現し、そのことにより、子どもの学習への興味・関心、意欲を持続させることができた。まさに「デジタル連絡帳」活用による、家庭と学校の連携システムにより教育支援活動が強化されたといえる。

これまでも特別支援教育では、子ども達が学習に対して不安なく混乱なくスムーズに、自分から学習活動に取り組めるためにも、学習内容・学習活動への見通しが持てるような教材提示の仕方や、指導・支援の工夫を行ってきたが、今回「デジタル連絡帳」を活用することによって、具体的な学習内容・学習活動に関する情報が、子どもと共に、家庭とも共有できた。その結果、家庭でも事前学習としての学習環境づくりが行われ、その様子を学校に発信することによって、家庭と学校とが連携して、子どもの学習意欲、興味・関心をより高める効果として表れた。

## 2. 子ども同士の連携

小学部では、毎日1時間目の学習に設定されている「朝の会の場面である。これまでは、子どもの家庭での様子について紙ベースの「連絡帳」の文面を、口頭で読み伝えていた。子ども達にできるだけわかりやすいように、言葉を簡易にするなどの工夫は加えられていたが、言葉の理解が未発達な子ども達にとってはその内容の伝達には限界があり、家庭の様子を子ども達へ紹介・伝達するというよりも、主にチームティーチングで授業を行っている補助の教師への伝達に留まることが多かった。

ところが、「デジタル連絡帳」を活用すれば、結果2の(1)(2)(3)(4)で見られるように、家庭通信欄で送信されてくる写真や動画は、子ども達の興味関心を確実にひくことがわかる。「お家見よう！」と子ども達自ら声かけをして、テレビの前に集まる姿、結果2(1)は、まさに子ども達の興味・関心が集中した姿である。

また、それぞれの家庭から送られてくる写真や動画は、自分自身が主人公であり、「自分が映っている」ことには特に強い興味・関心を示して、画面を見入っている(結果2(1))。離席していた子どもも、自分の映像になると席に戻ってくるという姿も見られた。このように映像への関心は非常に高く、子どもの学習意欲への影響力も強いことがわかる

またその映し出される映像の内容は自分自身の知っていることであり、実際に家庭で経験していることである。そのためその場にいる友だちや教師に向かって、その写真や動画を指さししながら、「見てみて！」と自

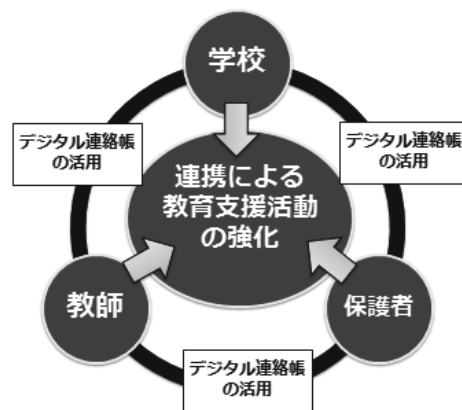


図1 家庭と学校間の連携

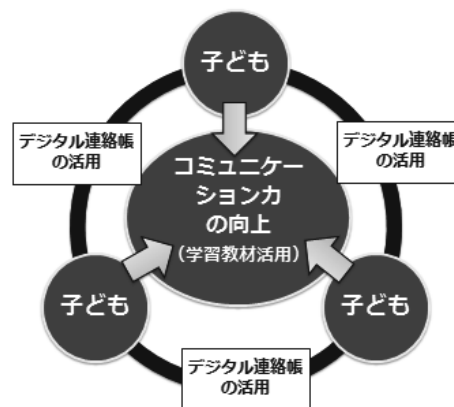


図2 子ども同士の連携

分のその状況を説明し始める（結果2（4）（5））。相手に伝えたい欲求の表れであり、このことはコミュニケーション学習の基本となる部分である。この伝えたい欲求が土台となって、次に、相手に伝わる言葉が必然となり覚えていく。伝わる言葉を使い、このことを繰り返していくことにより言葉を使えるようになっていく。この一連の言葉への行動を引き出したのは、「デジタル連絡帳」の映像情報である。「デジタル連絡帳」の活用は子どもと子どもをつなぎ子ども同士がかかわり合いながらコミュニケーション力向上の学習教材ともなっている。

さらに、家庭から送信されてくる映像には、お手伝いを頑張っている姿、工作を頑張って作り上げた様子等、朝の会で視聴すると「〇〇ちゃん、すごい！」「頑張ったんだね！」と、友だちや先生から褒められ、認められる場となっている。子どもは得意げな表情をする。何度でもその映像をリクエストして視聴したがる子どももいる（結果2（2））。考察1と同様に、「デジタル連絡帳」活用が、子どもの日々の様子を認め、自尊心の芽生えを促す機会をつくっている。Bさんは「写真撮って」と保護者にせがむほど、また皆に見てもらいたい・伝えたいという気持ちがうまれており、そのことから次の学習への意欲も感じられる。

以上のことから、「デジタル連絡帳」による情報は、子ども達同士の行動を促し育てる学習教材ともなり得る。

### 3. 家族の連携、つながり、絆

「デジタル連絡帳」活用による効果3つ目は、「家族の連携、つながり、絆」である。ほとんどの家庭ではこれまで、子育ては母親中心の傾向が強かった。従来の紙の「連絡帳」では、年間を通じて記入しているのは母親であり、聞くところによれば父親や子どもの兄弟姉妹が、実際に読んだり記入したりすることはほとんどなかった。

ところが「デジタル連絡帳」を活用することによって、学校や家庭での子どもの様子を、タブレットPCを開くだけで、写真や動画でリアルに見られるようになった。結果1（3）のように、写真や動画に、父親や兄弟姉妹、親戚が登場することも頻繁にある。父親はもとより、祖父母、兄弟姉妹、親戚までもが、興味・関心を高め、子どもを取り巻く家族が、「デジタル連絡帳」をきっかけに、その子どものことを常に話題にするようになったことがわかる。つまり、身近な人たちが、より有力な療育者、支援者になってくる。そして、子どものことが話題になることで家族が繋がり、絆が深まるということは、結果、支援連携が強化され、障がい児のいる家庭に一番大切なこととなった。

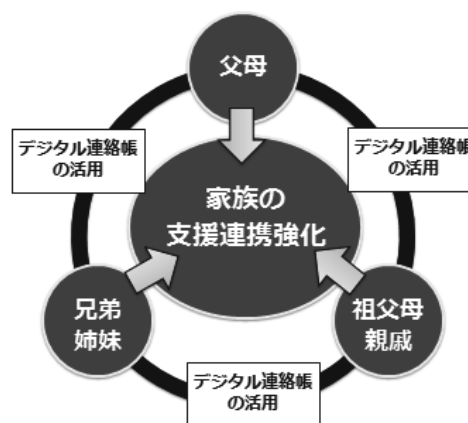


図3 家族の連携、つながり、絆

### 4. 家庭・学校間の連携による教育共生

「デジタル連絡帳」活用による効果の4つ目は、「教育共生」である。「デジタル連絡帳」で送受信される写真や動画は、結果2（5）で見られた家のお手伝いの「鍵の開け閉め」や、「ハンバーグ作り」といったような子どもが頑張ったことや、子どもが家庭や学校で興味・関心のあること、子どもの特技等、子どもの良い点についての話題が圧倒的に多いことがわかった。

このことは、保護者も教師も「デジタル連絡帳」活用の実践を通じて、自然に日々の生活の中で子どもの良い所を探し、美点凝視をするようになる。

このように保護者や教師が、日常生活の中で、何気ない子どもの行動やしぐさの中にこそ見られる子どもの成長や発達

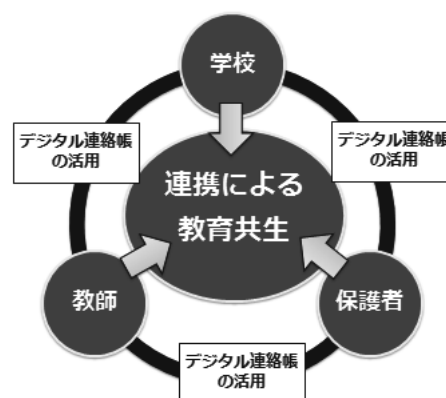


図4 家庭・学校間の連携による教育共生

様相を実感できるようになり、そのことを他者と連帯して喜び合い共感することを、毎日積み重ねていく。これはまさに、子どもの成長・発達と共に、保護者も教師も、学校も、共に教え、教えられ、育て、育てられ、共に連携して生きる「教育共生」の姿となっている。このことは、家庭・学校間の信頼、安心の基盤形成を力強く推進してくれるにちがいない。

## V おわりに

以上のように、本論では「デジタル連絡帳」の活用によって、家庭・学校間の連携システムが構築され、その運用実践事例を通じて得られた効果について考察してきた。「デジタル連絡帳」の活用と連携システムによる効果は、今後も活用実践を継続し、対象を広げることによってさらに多岐にわたり、教育支援連携活動のツールとしてその効果が多大なものとなることが予想される。

従来、特別支援学校では「連絡帳（紙ベース）」が使用されており、日々の健康状態や日常生活における子ども情報を家庭と学校とでやりとりしてきた。ところが、そのほとんどが保護者や教師による手書きであるため、個人差、言葉・文章・時間等の制約といったことがあり、正確な子ども情報の伝達・共有が難しく、連携した活動が十分にできていなかったこともある。「デジタル連絡帳」の活用によって、家庭と学校における日々の子ども情報は、よりリアルに共有できるようになり、子ども情報の可視化、情報共有は、家族間のつながり、家庭と学校との連携を太く深くし、保護者の信頼と安心に繋がっていくと思われる。

今後は、本研究で活用実践を行った小学部低学年から、中学年、高学年と活用の範囲を広げていき、「デジタル連絡帳」の活用と連携システムにより、子ども情報をもとにした家庭と学校による教育支援連携活動の強化をより一層はかり、子ども達の成長・発達に大きく貢献していきたい。

家庭・学校・地域とのチーム支援・連携は、今後益々、教育・支援において重要視されると考えられ、情報の共有化やオープン化の必要性は加速度を増し、関係諸機関は子ども情報のオープン化が求められることとなるだろう。これは教育・支援の資質が問われることでもある。「デジタル連絡帳」の活用と連携システムによる教育支援連携活動が、情報オープン化への風穴を開け、子どもの成長・発達を促進するための教育力・支援力の向上を促す働きの一つになればと考えている。

### 【謝辞】

本研究を実施するにあたり、京都教育大学、京都教育大学附属特別支援学校関係者及び小学部保護者の皆様、榎Switch様には、多大なる協力（写真掲載の承諾を含む）をいただきましたこと、厚く御礼を申し上げます。

### 【附記】

本研究の一部は、京都教育大学平成26・27年度教育研究改革・改善プロジェクト研究助成を受けて行った。本論文に関連する内容は、日本教育大学協会研究集会（平成27年）、日本発達障害学会第50回大会、日本LD学会第24回大会にて発表した。

### 【参考文献】

1. 中川宣子(2015)「デジタル連絡帳」を活用した三位一体の教育共生について～特別支援学校における教育共生事例 (2015)日本LD学会第24回大会論文集. 301-302
2. 中川宣子(2015)「デジタル連絡帳」を活用した三位一体の教育支援連携活動について～保護者・教師・学校の教育共生事例より～(2015)平成27年度日本教育大学協会研究集会発表概要集. 146-147
3. 中川宣子(2015)「デジタル連絡帳」を活用した教育共生について (2015)日本発達障害学会第50回研究大会論文集. 116p
4. 中川宣子, 高岸正司 (2015) 特別支援教育における家庭・学校間の連携システムの構築—「デジタル連絡帳」の活用—, 京都教育大学附属教育実践センター機構 教育支援センター 教育実践研究紀要第15号
5. 中川宣子(2014)特別支援学校における家庭・学校間の連携システムの構築—「デジタル連絡帳」の開発と活



- 用システム一. 平成 26 年度日本教育大学協会研究集会発表概要集. 168-169
6. 中川宣子 (2014) 家庭・学校間連携のための「デジタル連絡帳」の作成と活用システムの開発—「家庭欄」「学校欄」記述内容の特徴について—. 日本LD学会第 23 回大会. 405-406
  7. 中川宣子 (2014) 家庭・学校間連携のための「デジタル連絡帳」の開発と活用システム. ATAC カンファレンス 2014. 67 - 68
  8. 中川宣子 (2014) 特別支援教育における家庭・学校連携システムの構築と検証. 平成 25 年度日本教育大学協会研究集会発表概要集. 273-274
  9. 中川宣子 (2012) 特別支援教育における家庭・学校連携システムに関する研究～教師の連絡帳記述内容分析を通して～. 日本臨床発達心理士会第 8 回全国大会論文集. 104p
  10. Noriko, Nakagawa (2012) Recording Teacher 's Viewpoints on the Teaching and Learning Activities An Effective Strategy to Support Curriculum Development by Using a Digital Camera, The Third Pacific-Rim Conference on Education. Teacher Education and Professional Development. 46-48
  11. 中川宣子 (2012) 家庭・学校の連携による教育的なニーズに対応した指導・支援-連絡帳記述内容の分析-. 京都教育大学附属教育実践センター機構 教育支援センター 教育実践研究紀要第 12 号. 185-188
  12. 中川宣子 (2011) 教育的ニーズに対応した授業づくりに関する研究～連絡帳分析による試み～. 日本発達障害会第 46 回研究大会論文集. 178-179